

## アイテム別 いる・いらぬの判断基準



実践編ではまず、遺品アイテム別の判断基準をご紹介します。

本人は気に入っていたが、遺族は引き取りたくないもの

↓ 供養する

故人が愛用していても、それはあくまで故人の好み。身内であつてもまったく関心のないものも多いでしょう。特に、故人が毎日使っていた杖や髭剃り、かつら、衣類など、言い出したらキリがありません。

しかし、こうしたものこそ、判断に迷うものなのです。

誰かが引き取って保管したり、まして使用することは、まずないでしょう。

となれば、処分するしかありません。いくら本人が気に入っていても、多くは一般に市販されていたもの。気にしすぎないほうがよいと思います。

「とはいええ、少し気が引ける」そんな方の精神的ストレスを少しでも軽減するため、

故人の大切に使用していたものを天国へ届けるために、「供養」という手段があります。

祭壇の前に遺品を供えて、僧侶に遺品の供養祭を行なってもらいます。

これは「最後の締め」のようなもので、供養まですることによって「できる限りのことはしてあげた」という気持ちになり、遺族の気持ちにも区切りがつくようです。

専門業者や寺院、神社などで、この遺品供養サービスを実施しています。

料金は平均して、五〇〇円前後から三万円くらいまで。量にもよるので、まずは相談を持ちかけてみるとういでしょう。

供養後は引き取るか、一般廃棄物として収集業者に任せることとなります。

まだ使えそうなもの



リサイクル品として売る

「自分はいらないけれど、もったいないし、少しでもお金になれば……」

このように思う人はたくさんいます。しかし、その感覚と現実には、大きなギャップがあるのです。